

「望嶽碑」 解題

(静岡県富士市柏原町 2-72 正法山立圓寺境内)

【碑文】

予性愛山 又喜画山 山莫奇於富士 富士之勝莫如望於此間 予未見富士抛画想之 既見
抛見画之 凡祇役江戸經此者数矣 每停輿佇望 爽然自失低回 移晷不能去 欲就而終焉
勢不可得 古人不云乎 誰為後來者当与此心期 乃翦頭毛瘞此地而表志焉 欲使百歳後遊
魂亦有所依云 予姓柴田名景浩字子博称龍溪 尾藩侍医也 文化戊辰五月 景浩自誌

【読み】

予、性、山を愛し、又山を画くことを喜ぶ。山に富士より奇なるは莫く、富士の勝れたる、
此の間より望むに如くは莫し。予、未だ富士を見ざりしに画に抛りて之を想い、既に見た
れば見るに抛りて之を画く。凡そ江戸に祇役するに此を経る者数なり。輿を停むる毎に佇
みて望み、爽然自失して低回し、晷を移すも去る能わず。而に就きて終焉せんと欲すれど
も、勢を得べからず。古人云わざりし乎、「誰か後來の者となり、まさにこの心と期すべき」
と。乃ち頭毛を翦り此の地に瘞めて志を表わし、百歳後の遊魂をして亦依る所有らしめん
と欲す。予、姓は柴田、名は景浩、字は子博、龍溪と称す。尾藩の侍医なり。文化戊辰五
月、景浩自ら誌す。

【意訳】

私は生まれつき山が大好きで、また山を絵に描くことが好きである。山といえば富士より
すぐれた山はなく、富士の眺めといえはここから望むのが一番である。私は、富士を見る
前から絵を見て想像をめぐらしていたが、富士を見てからは自分の見たままを絵に描いた。
参勤交代のために何度もここを通ったが、輿が休憩するたびに佇んでは富士を望み、ぼん
やりと我を失って行きつ戻りつし、時間が来ても出発できなかった。願わくはおまえ（富
士）のふもとで死にたいと思うが、なかなか思うに任せない。昔の人も言ったではないか、
「誰か将来ここを訪れる人があったなら、きっとこの心境を理解してくれるに違いない」
（中唐の詩人・柳宗元〔773-819〕の「南礪中に題す」末尾の詩句）と。そこで、髪の毛を
切ってこの地に埋めることで気持ちをここに表わし、百年後の私の魂のためにも戻ってく
べき場所をつくっておきたいと考えたのである。私の姓名は柴田景浩、あざなは子博と
いい、龍溪と称する。尾張藩の侍医である。文化戊辰（1808年）五月、景浩自ら記す。

【柴田景浩年譜】

- 1745年1月、尾張国琵琶島村の農家・柴田了光（1718-1773）の次男として生まれる。
- 1764年、京都の浅井南溟（1734-1781、天朝侍医。尾張藩典医・浅井凶南の長男）について医を学び、かたわら宮崎筠圃（1717-1774、古義学。墨竹画に巧みで、在京時代の浅井凶南らとともに平安の四竹と称される）に儒を学ぶ。「年十九にして医に志す。家貧なりしも入京、余が宗家の奴となり、以って方脉を習う。主人その不凡なるを知り、愛偶すること殊なり」（凶南の孫・浅井貞庵〔1770-1829〕による墓誌）。
- 1768年、名古屋城下に開業、屋号を不匱堂と定める（宮崎 筠圃の命名「勤むれば則ち匱しからず」〔春秋左氏伝〕の意）。「わが党・西涯柴生〔柴田景浩〕かつて京に遊学し、その東帰の日に余が友・筠圃生、不匱の二字を写し、以って贖となす。／家に還れば創業一日として懈らず、夙夜奔走し、以って医薬を施す。数載ならずして薬金に贏りあり。乃ち宅を漕河の濱に買う」（浅井凶南）。「出ずれば則ち民の疾苦を救い、脈を察して方を施す。昼夜寝ねずして、以って寡過を思う」（鈴木胤）。「病を觀、薬を施すに貧富を問わず。東西請召して暇時あることなし」（墓誌）。
- 1773年5月、父・了光没。「君の父の喪に居るや、哭泣して食らわず、傷悼して絶ゆるに至る。葬祭は俗礼に従わず、親戚郷党の觀る者、大いに悦ばざるはなし」（鈴木胤）。
- 1778年、『張城人物誌』に「田景浩 字玄竜号西涯 堀河下」として載る。
- 1779年、前年冬の大火で家を焼かれるが、この年の春には復興。「にわかに池魚の殃いを罹り、全く鳥有となる。西涯、奮然として色をなして曰く、これ天のわが愾なるを警するなり、われ何ぞ天意を奉ぜざらんやと。／すでにして廻ち外は診治に勉め、内は土木を営み、昼夜汲々として寝食に暇なし。あえて材を人に貸りず、あえて援けを他に乞わず、興宅高敞としてほとんど旧構に邁るは天意の感ずるところなり」（浅井凶南）。同年9月、浅井凶南（73歳。1706-1782、尾張藩典医。師・浅井南溟の父）、市川鶴鳴（39歳。1740-1795、古文辞学）、鈴木胤（15歳。1764-1837、国語学。市川鶴鳴に学び、のち本居宣長に学ぶ）の三氏に不匱堂の由来記を書いてもらう。同年（あるいはこれより数年前か）、同郷の山田里登（1756-1822、医師・山田重蔵の娘、鈴木胤の実姉）と結婚。景浩34歳、里登23歳。
- 1781年、義弟・鈴木胤（当時17歳）、景浩に書簡を送り、家業を継がず学問に志すことを宣言（①）。同年11月、師・浅井南溟没、「門人柴玄龍」として墓誌を撰する。
- 1784年5月、義父・山田重蔵没、墓誌を撰する。
- 1788年、法橋に叙せられる。
- 1791年、尾張藩寄合医師となる。同年6月、鈴木胤のために『方丈記』を写本（②）。
- 1794年、尾張藩典医となる。「声価弥まし、貴公族以下、国の豪貴みな柴一門を頼む」（墓誌）。
- 1795年3月、鈴木胤、御近習組同心となり江戸勤番に出発。景浩夫妻が見送る。
- 1808年5月、望嶽碑を建立。
- 1812年6月22日没、67歳。女婿・柴田桑軒（?-1832、尾張藩医）が継ぐ。
- 1834年、鈴木胤著『養生要論』に景浩の説が紹介される（③）。

- ①「夫れ医の賤業たる、もしその説を知るや、技の顕わるる者は、あるいは以て優佚に陞り、厚俸を享くるなり。しかりといえども、その業たるや技にして道にあらず。期するところのものは、一職の用に供して温飽の利を博するにあり。身をここに終えて遷すことなし。国を経むるの志、志を輔くるの義あることなし。これ君子の賤しみて齒せざるところなり。」(離屋会館蔵)
- ②「右の本書、手のさまいとよし。誰人かはしらず、末に「慶長七年〔1602年〕仲秋中旬書之」と書きたり。それを大野黙也という翁、ふるきもの売る店よりふと見出でて、買い持ちたるを見るに、世にある板本とは所々たがいて、まされる事もありと見ゆれば、うつしおきまほしかるを、柴田の景浩ぬし、わがためにかく写したまわりつ。寛政三年季夏〔6月〕中旬、本書と校せおわんぬ。なお板本ともあわせおくべし。鈴木朗しるす。／この月二十二日の夜、ついに板本と校せおわんぬ。板本まされるは紫にて傍らに記す。あしきは注さず。」(名古屋市立図書館旧蔵『名古屋本方丈記』後記。原本は戦災で焼失。築瀬一雄編『碧冲洞叢書』第6巻所収、同『鴨長明研究』も参照)
- ③「余が姉婿・柴田龍溪と云う御医師に、ある大家の何がし殿の語り賜いける。「我は薄着をしても風邪ひかず。夏裸にて寝ても寝びえもせず。何を食うても当たる事なし。これは全く祖母何某禅尼の蔭なり。我が家追々病死夭死をしたるを見て、「この児は我おもう所あり、預かるべし」とて、隠宅へ我をつれ行きて、門番に渡していわれけるは、「我が家の孫ども追々に死ぬるはあまり大事にそだつる故と見たる故に、今汝にあずくるなり。ただその方の子と同様にしてそだてくれ候へ。御主の御子と見て少しにてもいたわりたれば、あずけたる詮もなし。其方ためにも損失あるべし」とて、一向わずかなるあてがいに預け置かれ、十余歳まだ門番の子になり居たり。さるに困りて此の如く息災なり」と語られしとかや。この禅尼は、独橋和尚とかやに学びて禅学をよくせられたる事、世に隠れなし。この一事にてもその抜群の聡明思いやるべし。」「我が縁者・柴田龍溪西涯は、いわゆる後世家にて灸治を好まれず。ある人曰く、一生涯三里に灸を三火ずつすえてそれ故に無病息災にて長寿なりと云うを聞きて、「さる事を長くつづけてよく行なう者は必ず何事もよく慎しみよく当たる者なり。これ息災長寿の道なり。あながち灸の功のみにはあらじ」と言われたり。この説も一理ある事なり。また思うに、長生する者には大かたもとよりさる気分の者多し。それに付けていよいよ長生する道理も有るべし。」(離屋会館蔵)

景浩の子孫には、柴田承慶(1794-1868、尾張藩医・狂歌師)、加藤行虎(1813-1860、尾張藩医・歌人)、柴田承桂(1849-1910、薬学)、柴田桂太(1877-1949、植物学)、柴田雄次(1882-1980、化学)、徳永康元(1912-2003、ハンガリー語学)、柴田承二(1915-、薬学)、柴田南雄(1916-1996、作曲家)らがいる。なお、景浩の描いた富嶽図のうち大小数点が現存しており、大きいものは柴田雄次によって日本化学会に寄付された。小さいものは柴田承二氏宅および柴田純子氏宅に残されている(以上、2003年5月5日上村泰裕記)。